

# 宰府画報

第1号

2020年7月  
(令和2年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課

## 発刊にあたり

信仰と歴史の聖地であり、文化都市でもある太宰府には、近世から近代にかけて、様々な注文に応じて絵を描く町絵師が活躍していました。彼らが描いた作品は福岡県内を中心に現存していますが、風化の危機にさらされている実情もあります。本誌『宰府画報』は、郷土の絵師や作品にまつわる解説やエピソードなどを盛り込みながら、現在進行中の太宰府絵師調査事業をわかりやすく紹介する広報誌として発刊しました。

## 太宰府の絵師三家

太宰府では齋藤家・吉嗣家・萱島家の三家が町絵師として活躍しました。きっかけは秋月藩

# 太宰府の絵師調査事業広報誌 創刊!



調査の様子

御用絵師を務めた齋藤秋圃が隠居して太宰府に住んだことにあります。秋圃は晩年の二十年ほどを子の梅圃とともに太宰府で過ごし、筑前を中心に多くの作品を残しました。吉嗣家は秋圃に絵を学んだ梅仙から、拜山・鼓山の三代が詩書画の道で活躍しました。特に拜山は事故で右手を失いながらも左手一本で数多くの作品を残し、その知名度は全国に知れ渡るほどでした。息子の鼓山は寺社の石碑等に多くの書を書いていきます。萱島家は鶴栖・秀山・秀岳・秀峰・秀溪と、現代にいたるまで絵師を輩出しています。秀山と秀岳は絵師として活動しながら太宰府郵便局長をつとめ、代々にわたり伝統行事の記録図を描くなど、地域に貢献し続けた家系でした。

## 調査の経緯

これまで、太宰府市における絵師の調査は市史編さん事業や文化ふれあい館の特別展等にあわせて実施されてきましたが、概要調査に留まり、継続的な調査に至っていませんでした。しかし、平成十五年(二〇〇三)に齋藤家から新たな画稿類が発見されたことをきっかけに、資料の散逸防止と体系的な調査の必要性が高まり、平成二十六年より専門家を中心に体制を整え調査を開始しました。事



吉嗣家に伝わる多数の資料

業の第一弾として、齋藤家で確認された秋圃と息子梅圃の関係資料調査を四ヶ年かけて実施しました。この成果は平成三十年(二〇一八)に『太宰府の絵師調査報告I 齋藤秋圃・梅圃関係資料』の刊行、文化ふれあい館での展覧会『太宰府の絵師展』開催につながり、齋藤家資料の重要性を周知することができました。齋藤家資料は同年四月に太宰府市指定文化財として指定を受け、現在、調査は吉嗣家資料を中心におこなっています。

## 絵師調査の必要性

各家に伝わる資料からは、絵師の人となりや絵画制作に関する多くの情報を得ることができまます。また、彼らと交流を持った他の絵師や文人、あるいは太宰府を訪れた著名人との交流を示す資料も含まれており、調査の進展に伴って、新たな事実が確認されることも期待されます。町絵師の資料がまとまって現在まで伝わっていることは全国的にも珍しく、太宰府の歴史や文化を明らかにするうえで欠かすことのできない資料群です。(木村純也)

## メイシヨ メイブツ

## 太宰府天満宮絵馬堂

太宰府天満宮の本殿に向かって太鼓橋を渡んでゆくと、左前方に、古風で大きな建物が見えてきます。今から約二百年前の文化十年(二八一三)、博多生まれの学者奥村玉蘭の発願によって建てられた絵馬堂です。絵馬は人々の祈りや願いが託される神聖なものです。が、当代一流の絵師が腕を競った豪華な絵馬は、人々の目を楽しませるものでもありません。この絵馬堂はかつて書画堂とも呼ばれていたように、美術館の役目もあつたのです。

現在の絵馬堂には江戸時代から平成にいたる約五十面が掛かり、堂の建立まもなく奉納された齋藤秋圃筆《袴垂図》をはじめ、萱島秀山・吉嗣鼓山の合作など、太宰府の絵師の絵馬も見ることが出来ます。落下防止と鳥除けのための網が張ってありますが、少し目を細めるとピンと合って、往時の鮮やかさや迫力が想像されます。秋圃、鼓山、秀山の絵馬は、いずれも堂の内部に掛かっていますので、ぜひ探してみてください。(井形栄子)



写真提供：太宰府天満宮

このコーナーでは、絵師や書画をキーワードにした市内の名所や名物を紹介します



# 逸品探訪

太宰府市内外に現存する  
三家の名品を紹介し

齋藤秋圃作

## 【諸画貼交屏風】

作家紹介

齋藤秋圃（一七七二〜一八五九）は江戸時代の筑前を代表する絵師のひとりです。京に生まれ、若い頃は大阪の遊郭で幫間（宴席で座興などをする芸人）をしながら絵を描いていたと伝えます。縁あって福岡秋月藩のお抱え絵師となり、隠居後は太宰府に住んで町絵師として活躍しました。福岡や太宰府など筑前を中心に、長崎や有田など各地に多くの作品が現存しています。



紙本墨画・着色／本体寸法 140.3 × 295.0 cm  
太宰府市指定文化財 齋藤家資料のうち 太宰府市教育委員会所蔵



自画像部分

### 秋圃の自画像？

六枚折りの屏風（※1）に、主題も大きさも異なる十五図―右上から順に虎図、鹿図、子犬図、鶴図、石図、鴨図、鍾馗図、梅に鷹図、寿老人図、山水図、人物図、風俗図（三図）、狸と狐図―が整然と貼られています。鶴、鍾馗、鷹、寿老人、人物の五図には、署名とともに八十歳から九十二歳までの年齢が記されています。「行年八十六歳土筆翁（※2）秋圃写」と書かれた人物図は秋圃八十六歳の自画像と思われま。鋭さと余裕をあわせ持つ眼光には堂々とした雰囲気があり、生涯現役で絵筆をとり続けた秋圃の人となりがにじみ出ているようです。

### 画題の見本帖

本作品は、齋藤秋圃の御子孫宅に伝わったもので、約千四百点におよぶ画稿（※3）その他の絵画資料とともに一括して太宰府市の指定文化財となった、齋藤家資料のうち的一点です。鶴図のくちばしと足先が不自然に断ち落とされていたり、印章が無造作な位置に捺される図もあることから、後世のある時期に、一連の画稿から取り出されたものを屏風に仕立てたものと思われる。自画像をおさめ、秋圃の画題のエッセンスを一堂に集めた、見本帖のような作品だと言えるでしょう。（井形栄子）

### 【キーワード】

- ※1 屏風 日本古来の調度品。部屋の出入口に置いて風よけや目隠しにしたり、間仕切りとして用いらた。装飾や儀礼の道具として書画がほどこされるものが多く、日本美術の二形式ともなっている。
- ※2 土筆翁 秋圃の雅号（ペンネーム）のひとつ。晩年に用いられた。
- ※3 画稿 絵の原稿、つまり下書きやスケッチ等のこと。

いちまい 賞 鑑 稿 画

## 齋藤家資料 【狗子図】



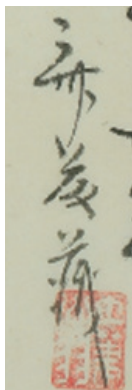
紙本墨画・着色／39.4 × 26.8 cm

子犬が三匹。手前の二匹は視線の先に気になるものがある様子、奥の一匹は少し不安げな目をして隠れています。まるまるとした子犬の図は、可愛いだけでなく、多産と健康の象徴として好まれる画題でもありました。真つ白な犬と白毛まじりの黒犬との取り合わせや、子犬たちを様々なポーズや角度からとらえて描くのは、江戸時代を代表する画家、円山応挙にならったものです。写実的で平明な応挙の絵画は京都を発信地として全国で人気を集め、多くの絵師たちに影響を与えました。齋藤家資料の中には同じような子犬図が全部で九点あり、この絵を敷き写したように全く同じ図柄のものもあります。応挙の山水図を模写した図ものもされています。秋圃や息子の梅圃も応挙の作品を学んでいたことを示す資料です。画面右下にくずし字で文字が書かれています。何と書かれているかは左の記事をご覧ください。（井形栄子）

### ひとこと くずし字

## 【齋藤蔵】

まずはこちら 齋藤蔵の資料を見ていると見慣れない文字があることに気づきます。いわゆる「くずし字」という文字で、今から百年程前には一般的に使用されていました。絵画作品においては作者の名前や製作年などが記されており、貴重な情報となります。



も絵師

このコーナーでは今後

今回ご紹介したいのは太宰府に町絵師の活躍基盤を築いた齋藤秋圃の「齋藤」という文字。この文字読めますか？これは「齋藤蔵」と書いてあり、画稿に齋藤家のものだと分かるようにメモ書きをしたものだ

資料で気になるくずし字をご紹介します。もし絵画作品を見る機会がありましたら読めるかどうかチャレンジしてみてください。（木村純也）



齋藤家資料《猪図》より